大学入試改革をめぐって「高大接続システム改革会議」は「高校基礎学力テスト」と「大学入学希望者学力評価テスト」を2本立て併置して複数回受験させる案を「中間まとめ」として発表しました。

塾の会・愛知テスト委員会はその案を検討しましたが、中学～高校教育に大きな弊害を生じる恐れのある制度だと判断しましたので、反対の意見を当局に表明いたします。また、広く教育関係者や生徒・保護者の皆さんに知っていただくためにこのホームページに掲示いたします。

「格差を拡げる教育改革を再検討しよう」

このところ私たち地域の学習塾には「学校の授業がわからない」と悩んで相談に来る中・高生が増えてまいりました。ひと昔まえまでの「学校で基礎基本を学び、塾では将来の受験めざして勉強する」役割分担がまるで逆転した感があります。「わかるまでじっくり教える」「考える力を育てる」授業はいまや合格実績を競いあう学校教育から消え去って、心ある学習塾や限られた学校にしか残っていないのでしょうか。

この風潮を放置すれば、青少年の学力の上中下三極分解がすすみ、学力中～下位層の崩壊が進行しかねません。大きく変わりつつある二十一世紀の「知識基盤社会」を乗り切るための教育改革においては、これからの社会を切り拓いていけるすぐれた青少年を育てる要請と、拡がる格差のなかで中～下位層が生き抜いていけるように「底上げ」する要請と、これら両立の難しい課題をともに結びつけて進めていかねばなりません。

高校教育はいま深刻な壁に突き当たっております。共通一次試験のスタートから四十年ちかくを経た今日、これまでの問題点をあらい出して、社会の土台になる教育を築き直す改革を急ぐことに異論はありません。しかし、学ぶ意欲と学力の格差が拡がった深刻な事態を日々の教室で直接体験している現場実践家の感覚から見ますと、コロコロ変わる教育の指標や行き過ぎた指導要領の提起は消化不良の病根を蔓延させてきました。

また、目先の市場ニーズに応えるだけの視点から高度な専門人財の育成に偏った教育改革を進めれば、かえって全体の学力格差を拡げ、「荒れた学校」「中退者やニートの増加」など社会の病理を生み出しかねません。

教育のありかたは、私たちがどのような社会を築こうと願っているのかに関わる問題です。関係者のみならず広く国民的な議論を深める時期になったのではないでしょうか。

「二本立ての新テスト案に反対する声明」

大学入試改革について高大接続システム改革会議の中間まとめに示された「新テスト二本立て」案の撤回を要望したい。知識偏重の入試と受験教育化した学校教育を変えようとする意図は理解できますが、原案通り実施されますと大きな弊害が生じます。私たち塾の会・愛知は次の理由により「二つの新テストを併置する案」には反対します。

第一は、高校までの教育の質的転換を新テストの圧力で促すことには賛成しますが、「合否判定機能」を存続させる限り学校ではこれまでのセンターテスト対策・過去問中心演習と同様の対策授業が再生産され、「問題発見・解決型の学力」「グローバル人財」育成の教育に必ずしも転換しないのではないでしょうか。公立・私立とも合格実績をめぐって熾烈な競争を繰り広げる風潮が相変わらず続き、成績上位層は「受かればよい」指導のもと受験勉強に没頭し、中下位層は「一体改革」の目指す新しい質の授業や評価についていけなくなり、いずれも「薄っぺらな学力」のまま大学～専門学校に進むことになります。

第二は、高度な人材育成は大学等の課題ですから、高校までは「生きる基本になる教養」をしっかり身につければよいと考えます。ほとんどの中卒生が高校に進み高卒の八十％が進学する時代になっていますから、中学・高校の教育で多様な進路への全面的・直接的な接続を狙えば、教育制度は四分五裂します。高校段階で将来の人生設計別にコースを分けてしまうことには無理があり、また、大学がその専門教育の前準備を高校教育に求めることも筋違いです。大きく拡がった学力差と生徒構成に応じて各高校が「普通教育の完成と職業教育」の工夫に努めることが唯一の解決策ではないでしょうか。それを前提にすれば「大学入学者選抜」に多大な「高大接続機能」の役割を盛り込むのは非現実的です。大学は募集形態を変え、大ぐくりの学力をみる多面的測定テスト「基礎学力テスト」の成績を利用して初年次教育で専門教育との接続を図るべきです。

第三に、大半の高3生は年間5～8回の考査と6～11回の模試を受けていますが、その高校教育に複数回受験の新テスト二種が割り込めば、高校はこれら公的テストに追い回され、本来の責務である「社会を支え未来を生き抜く力」を育む教育が疎かになります。「考える力」を育てる様々な教育課程の試みを手掛けることも難しくなることでしょう。「二つの新テスト併置」がもたらすテスト漬けスケジュールの圧迫は取り除かなければなりません。

第四に、難度の高い「大学入学希望者学力テスト」を別立て実施すれば受けられる生徒は限定され、センターテストで55万人にまで拡大した受験者は半減すると予想されます。生徒も学校も上中下に分類選別され、この入試制度によっていっそう階層化が進み、中下位層の崩壊を招き社会的格差の拡大を助長するのではないでしょうか。

結論として提言します―二つのテストを併置せず「基礎学力テスト」に一本化し、IRTを活用して思考力まで測定できるように拡充し、教科数も増やして「高校で達成すべき標準的な学力」測定に目的を絞る。同時に、「合否判定機能」をはずし、「履修認定」と大学等の指定する「出願要件確認」に機能限定して、就職希望者から上位大学志望者まで幅広く受ける総合テストにすべきだと考えます。